

「キアカハ（一緒に頑張ろう）」の 精神でともに歩む



駐日ニュージーランド大使

イアン・ケネディ

Ian Forbes Kennedy

カンタベリー大学大学院（経済専攻、修士）を経て、外務省入省。駐トルコ大使（イスラエルおよびヨルダン兼任）情報・広報局長、駐臺高等弁務官事務所公使、などを経て、二〇〇七年より現職。日本での勤務は一九七七年、八六年、八九年に続き、三度目となる。

獨協大学教授

永野隆行・聞き手

1998年上智大学大学院単位取得退学。獨協大学准教授などを経て、2008年より現職。共編著に『オーストラリア入門』など。

宮城県南三陸町での捜索・救助活動を行ったニュージーランド救助隊。ミッチェル・ブラウン副隊長が「ニュージーランド地震の時には日本に助けてもらった。われわれも生存者の救出や捜索活動に励みたい」と述べたように、ニュージーランドでも二月二日、回国第二の都市クライストチャーチ近郊で大規模地震が発生し、日本人二八名を

含めた多くの命が失われた。震災の苦しさがわかるからこそ、いま日本に送る、大使からのエール。

——このたびの東日本大震災では、ニュージーランド政府、ならびにニュージーランド国民から暖かいご支援と励ましの言葉を頂戴しましたこと、心よりお礼申し上げます。

ニュージーランド南部地震から一カ月も経たないうちに、今回の地震が発生いたしました。まずは率直なご感想をお聞かせください。

ケネディ 今年二月のニュージーランド南部地震では、クライストチャーチ市内のビルが倒壊し、外国語学校に通う日本人留学生が亡くなったことは、私たちにとっても悲しい出来事でした。その一方で、日本の方々の迅速な対応にニュージーランド国民は励まされました。地震が起こった直後、前原誠司外相（当時）から私に電話があり、支援の申し出を頂きました。その後すぐに私は外相と直接お会いして、緊急援助隊の派遣をお願いしました。翌日の正午には派遣が決定される早さでした。さらに日本は募金や物資の提供を行ってくださいました。

私は四月一三日、クライストチャーチの姉妹都市である岡山県倉敷市を訪問しました。倉敷市はニュージーランド南部地震で、救援隊の派遣、防塵マスクや給水タンクなど、被災した市民がまさに必要としている物資を送ってくださいました。私はニュージーランド国民を代表して、倉敷市の皆さんにお礼の気持ちを伝えるに参ったのです。日本のこうした素早い対応と支援は、両国の友好関係の証左であり、両国の絆をこれからも深めていこうという気持ちを強めた

のです。

両国の絆があるからこそ、ニュージーランド政府が東日本大震災の発生を受けて、日本の方々の最も必要とするものをすぐに提供しようと考えたのは当然でした。地震が発生して直ちに緊急援助隊を派遣し、寄付金も送ることができました。大規模な緊急援助隊の海外派遣はニュージーランドにとって初めてのケースでしたが、両国の絆がそれを可能にしました。

ニュージーランド南部地震、東日本大震災における両国の助け合いは、今後の両国関係にとって歴史的な節目にもなるのではないかと考えています。

過酷な状況下で懸命の搜索活動

——震災直後の大使館の対応はどのようなものでしたか。

ケネディ まずはウエリントンに連絡を取り、大規模地震の発生を報告するとともに、今後も緊密に連絡を取り合うことを確認しました。しだいに津波による被害の状況が明らかになり、映像を通じて見たあの大津波の恐ろしさは一生忘れることができないでしょう。そして福島第一原子力発電所の事故も伝えられると、大使館としては原子力発電所の周辺に住んでいるニュージーランド人の安否確認作業

に着手しました。

また本国からだけでなく、ロシア、英国、マレーシア、韓国、米国、ベトナム、台湾から日本語ができる外交官を東京に集め、週七日・二四時間体制で大使館スタッフが一丸となって問題に対応しました。

こうした緊急事態では正確な情報の確保が大切です。外務省、経産省など日本政府から情報を入力しつつ、在京の各国大使館とも情報交換を行いました。これと同時にニュージーランド本国から原子力専門家を呼ぶなどして情報分析にも努めています。

一つ残念に感じたことは、海外メディアによる行き過ぎた報道です。これはニュージーランド南部地震の時と同じでした。ニュースによって伝えられる模様と、実際の現地の情勢があまりにもかけ離れているのです。曖昧な情報に惑わされず、「正しく怖がる」ことが大切であり、大使館のスタッフミーティングでもこの点について周知徹底を務めています。

——ニュージーランド政府は、震災の直後の一三日には早くも先遣隊を、一四日には救助隊員を宮城県南三陸町に派遣しました。彼らは一八日まで、厳しい寒さのなか救助活動に携わってくださいましたが、彼らの活動ぶりはどのよ

うなものでしたか。

ケネディ 現地での作業は過酷でした。夜間には気温がマイナス一七度にまで下がる地での作業でしたが、懸命な捜索・救助活動を行いました。大使館スタッフも同行し、現地ではテントで寝ていました。南三陸町では、ニュージーランドの救助隊員のほか、ドイツ、スイス、オーストラリアの救助部隊が活動しておりましたが、日本の外務省を通じて各国の連携、協力的体制が整いました。

また大使館スタッフは仙台にも向かい、現地に住んでいるニュージーランド人の退避をサポートしました。こうした過酷な状況のもとでも現地に残る決断をするニュージーランド人も多かったです。

自然との共存へ新たな一歩を

——ニュージーランドでは復興に向けた取り組みがすでに始まっています。これからの日本の復興についてお考えをお聞かせください。

ケネディ 今回の東日本大震災は、ニュージーランド南部地震の規模をはるかに超える大地震でした。さらに大津波が東北沿岸の町を襲い、福島県では原発の事故もありました。その意味で、日本ではきわめて深刻な複合的災害が発

生しましたので、新しい東北が立ち上がるまでにかなり時間がかかるでしょう。

ただし、確かに日本は多くの困難を抱えています。復興への展望があります。世界の国々の支援・協力を得て、素晴らしい、新しい東北、そして日本を作るという展望です。ニュージーランドをはじめとした友好国とともに協力して取り組めば、問題を解決することができると思います。震災はつらい経験でしたが、それを乗り越えてより良好な国際関係を築くことができると思っています。

今回の震災を契機に、日本国内でも、そして国際社会でも、助け合いの精神が強まったと感じています。そのような気持ちを継続させていきたいと心から思います。震災を両国の友好関係をより強固にする機会とすべきではないでしょうか。

——これから復興に国を挙げて取り組んでいく日本に、大使からぜひメッセージをお願いいたします。

ケネディ ニュージーランドと日本は、ともに環境に関する関心が高い国です。自然環境を大切にするという点で、両国の意見は一致していると思います。自然を恣意的に変えて、人間の都合に合わせていくのではなく、両国の科学

技術を駆使しながら、自然との共存・共生を目指していくべきだと考えています。

ニュージーランドは小国ですが、自然との共存・共生についていろいろな知識を持っていますので、日本に協力できる部分も多いのではないかと思います。私たちの叡智を結集して、より安全で素晴らしい国をつくらうという動きが出てくればいいのではないかと思います。

アメリカは今回、米軍による支援ミッションを「トモダチ作戦」と命名しました。とてもよいアイディアだと思います。ニュージーランドの場合、それは「Kia Kana（キアカハ）」キャンペーンです。キアカハとは先住民マオリの言葉で「強くあろう」「一緒に頑張ろう」という意味です。地震とともに被災し、これから復興をめざす両国が助け合いながらともに強くあろう、という気持ちを込めています。

またマオリ族は、自然との共存・共生をめざす日本人の考え方と共通する部分を持っています。そしてニュージーランドは国全体としても自然を尊敬し、守るべきだと考えています。国民生活の利便性の向上は確かに大切ですが、それと同時に自然との共存・共生を考えながらこれからの将来を歩んでいくべきだと考えています。■